

臨床イノベーションのための若手研究者の挑戦 —有床義歯治療と管理の新たな展開—

石上 友彦^a, 水口 俊介^b

Young Investigator's Challenge for Clinical Breakthrough and Innovations —New Strategies for Removable Denture Treatment and Management—

Tomohiko Ishigami, DDS, PhD^a and Shunsuke Minakuchi, DDS, PhD^b

わが国の高齢者人口は、過去最高の 2,958 万人となっている。さらに、「75 歳以上人口」は 1,430 万人で 9 人に 1 人が 75 歳以上人口という「本格的な超高齢社会」となっている。高齢者人口は今後、いわゆる「団塊の世代」が 75 歳以上となる平成 37 (2025) 年には 3,657 万人に達すると見込まれている。その後も高齢者人口は増加を続け、平成 54 (2042) 年に 3,878 万人でピークを迎えると推計されている。

昨年発表された平成 23 年度歯科疾患実態調査の結果では 8020 達成者は 38.3% となり、義歯を必要としている人の割合は減少している。しかしながら、高齢者人口の増加により、実数はさほど減少しないと考えられる。さらに 75 歳以上高齢者の 31.4% が要介護であるという推計も発表されており、有床義歯に関する諸問題が今後浮かび上がることが予想される。しかし、義歯に関する諸問題をサポートするシステムはいまだ十分とは言いがたい。これらのことを背景に、今回のイブニングセッションのテーマの一つを「有床義歯治療と管理の新たな展開」とした。

まず「評価」である。前回の学術大会での「補綴治療のドグマ」でも焦点になった、全部床義歯の製作手法と評価に関するエビデンスレベルの高い論文の著者である河相教授のもとで活動する菅野は、QOL を考慮した QALYs (quality-adjusted life-years: 質調整生存年) を用いた生存分析について解説し、その用法の一例としてフルバランスドオクルージョンとリングライズドオクルージョンの RCT の長期予後調査の途中経過について

報告した。QALYs とは、費用-効用分析の効用に用いられる概念であり、生存時間と口腔関連 QOL の両方を考慮することができ、有床義歯治療だけでなく、今後増大する高齢者の歯科の対応において、真に高齢者の幸福につながる可能性のある選択に有効な指針を与えてくれる手法となりうるであろう。

次に「製作」である。全部床義歯製作の CAD/CAM 化は、われわれの教室で長きにわたり温められチャレンジされてきた目標である。周辺技術の進歩や工学系の研究協力者にも助けられ、金澤が中心となりここまでまとめられたものである。今回は全部床義歯に関するものであるが、部分床義歯におけるフレームワークの CAD/CAM 化も報告されており、まもなく有床義歯全体へ CAD/CAM 化が広がると考えられる。そして、全部床義歯に関してはまだ乗り越えなければならない問題が実に多くある。現在は、旧義歯を改造したパイロッチデンチャーや専用の既製トレーにより、顎間関係を含めた印象体をスキャンし、デンチャースペースをデータ化しているが、そのデンチャースペース自体を CAD 化することが真の CAD/CAM であろうし、治療のボトムアップにつながるものである。そして将来はこの CAD/CAM 技術が教育にも応用され、より確実な有床義歯教育が実施されることが期待される。

三番目の軸は「管理」である。2012 年 2 月には ACP が全部床義歯のケアに関するガイドラインを発表した。義歯の汚れに起因するさまざまな障害や義歯の汚れの真相が明白となってきたが、記述を支えるエビデンスはい

^a 日本大学歯学部歯科補綴学教室 II 講座

^b 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔機能再構築学講座全部床義歯補綴学分野

^a Department of Partial Denture Prosthodontics, Nihon University, School of Dentistry

^b Complete Denture Prosthodontics, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Tokyo Medical and Dental University

まだ十分ではない。しかしながら、米国における高齢社会の進展に伴う必要性から、一般歯科医に対する補綴専門医からのメッセージとして発信されたものである。今後義歯の管理の簡便化はきわめて重要であることは明白である。ADLの低下した義歯装着者にとって、あるいは口腔内以外のことに多大な労力を割かざるを得ない家族、介護職員にとって、義歯の清掃は負担の重いものである。表面にアパタイトを被覆した複合型二酸化チタン配合レジンは、就寝時に取り外した義歯に紫外線照射するだけで、光触媒効果による酸化分解反応により有機物質(汚れ)を分解することが可能であり、多忙な介護者の負担を軽くし、患者本人の健康に貢献するであろう。

有床義歯治療に関してはさまざまな事項を議論しなければならないであろう。今回は「評価」「製作」「管理」

を軸としたが、他の事項は今後の議論の課題である。また、イブニングセッションは121回学術大会で初の試みであったが、大変好評だったと思う。若い気鋭の研究者が大きな目標に対して、いくつもの周到な研究計画で迫る様子は、将来の歯科補綴学の発展を想起させるものであり、実に頼もしく感じた。是非とも継続したい企画であると考えている。

著者連絡先：水口 俊介

〒113-8549 東京都文京区湯島 1-5-45

Tel: 03-5803-5582

Fax: 03-5803-5586

E-mail: s.minakuchi.gerd@tmd.ac.jp